な な V 哀 ため _ • 傾ける 20

可包 3/7

判したところで、自己批判そ

が自らの特権を罪悪視しそれ

するのか。加害者側の論理に の傷を共有するとは何を意味

との文脈で、マジョリティ

稲賀繁美 度である。だがそんな「エス りでしかないなら、それはそ 治的正しさ」のアリバイづく れ自体「植民地主義的」な態 ノセントリック」性を自己批

> の手段へと還元されてしま かえってマジョリティの免責 意見を拝聴」というかたちで、 るのだから――、「結構など うことは既に手なづけらてい 機会が与えられても-ィの主張は、仮に表明される

> を破る暗い欲望が噴出する。 張り巡らされた時、その論理 手があまりに複雑かつ巧緻に 数者と少数者を分かつ。禁じ れるべき経験が、かえって多 う副産物を生産する。分有さ と飛び火して、差別助長とい

> > 死を哀悼するのか。極東軍事 者を恕し、目を伏してその刑 熱狂するのか。それとも加害 しみつつ屠り、処刑の見物に 権利があるのか。加害者を憎

法廷の戦犯判決への違和感

「戦後賠償」の心理の「捩

では次に、加害者が被害者

い。予めお詫び申し上げる。

や性的指向性について言及し

ている」ことが、書き手の「政

の逆説について。たしかに「人 種/民族や階級、ジェンダー まず自己を追い詰める倫理

の内なる他者たる「在日」へくるのか。強者の奢りと弱者の

怨りとのあいだで、誰に裁く

、の屈曲した劣等感が、我られで、国際法廷をどとに設置す

を教える北米合衆国市民社会 現する。それも「移民の誇り」 助長させる、絶好の温床が出

分法——作業仮説-いだす文化、という乱暴なご し売りを謹むことに美徳をみ 善とみなす文化と、悪行の押 もあろう。正義の押し売りを 究極の復讐と見なされる恐れ

られた者であり、マイノリテ ティティを一方的に押し付け

によって自分たちのアイデン

舌足らずと唐突さを免れな

通りである。紙面の関係上、

の、おぞましい政治的効果を 発揮することは、以下に見る 意志ではなく、マジョリティ

15

とろで、それが弁解とは無縁 る。マイノリティとは自らの リティ)を忘却する営みとな

> 逆説的にもととに、「自虐史 その国民の「誇り」となる。

観を越えて」という居直りや

を慚愧の念とともに認めたと 白する。だが、自らの無能力 べき他者=被差別者(マイノ

足と裏腹に、本来問題となる

者(マジョリティ)の自己満 タのレヴェルで語り手=特権

いて懊悩することですら、メ ない罪障感を背負うことが、

> 意の一方的な押し売りこそ だろう。だが報復を越えた善 によって円環を断ち切る営み えるのが、負債を越えた贈与

が、復讐を許さぬかぎりで、

受している特権や、それが侵 害している他者の権利に気づ 恥じながら、それを解消でき

\$

作品に寄り添った著者の精緻 偽と効能。以下の議論が、個々

な分析や解読を無視する暴力

2605

と無縁でないことを、

、まず自

くば、日本人としての特権に

勧告することになる。さもな 破り捨て、無国籍を選べ、と

で国籍を捨て、パスポートを それは論理的必然として、二 に「日本人」を代入するなら、 本国民に対して、自らの意志 きかねない。この悪循環を越 植え付け、さらなる報復を招 害者側に新たな被害者意識を

の逆理。第二には復讐の円環

ける。だがそのさまを自己検 のが、それ自体で他者を傷つ

無意識のまま自己が享

第三には物語の虚

したい。第一には自己罪悪視

に孕まれた危うさを三点指摘

に「在日」を、マジョリティ するだろうか。マイノリティ 者側の論理による償いは、加

られました。本面と四面にそ

有な書物に寄り添って、そと

との恐るべき洞察を湛え 奇跡的とまで言いたい希

泰ならしめて、かえって差別

のものが、批判する主体を安

的メカニズムを温存すること

に手を貸す。自己批判そのも

『記憶/物語』の書評が寄せ

女の「正しい」名前とは何か 稲賀繁美氏より岡真理著『彼

れぞれ併戴します。

を放棄することは、 何を意味 よる償いを受け入れること 認する事になる。反対に被害 は、加害者側の道徳規範を承

第三に、出来事の記憶を分

れ」の原点に、なお淀む。

味を充当するのが、物語の使 りであり、その乗り越え難い 語はさらなる虚偽をしょい込 例えば敵への怨嗟の物語とい た事態が発生し、語り手は、 も言葉へと回収しようと試み ゆえに理解可能なもの、とし される。ある欠如を孕んだが することと裏腹に、物語が変 も絵にもならない過剰を排除 不完全さを暗示する。言葉に 余剰を生みつつ、みずからの は、必ずその外部にあらたな 叙述され描写された出来事 されえないのと同じことだ。 だ。それはカントの「物自体 のとしては表象不可能なもの 事の意味を探るほかない。戦 隔たりを通して、我々は出来 のは、物語と出来事との隔た むことにもなる。物語が語る るとき、そこには拷問にも似 て。その欠如――例えば言葉 が定義からして表象へと回収 能なのか。出来事とはそのも 有することは、いかにして可 意味な死に、事後になって意 争に駆り出された一兵卒の無 った記憶のうちに囚われ、物 にはならぬ苦痛ー ーをそれで のうえで或る危惧を表明した るまいか。 性との関係を、かろうじて想 や到達不可能な出来事の暴力 と、欺瞞を免れつつも、もは だけが、欺瞞でしかない物語 物語が、そうした見えざる背 厳をすら奪ってしまう。だが、 に直面した犠牲者の最後の尊 められてしまい、無意味な死 をめぐる物語によって塗り込 助けともなる。偽りの意味をうための犠牲、といった物語に事のあったことを否認する手。を、世界の平和と祖国復興の 徹した議論に敬意を表し、そ 起させる縁ともなるのではあ ことを決して忘却しない努力 面を宿してしか成立しえない 界。その落差は、人間の尊厳 偶然で理不尽でしかない境 死者とを分ける、決定的だが 温存する結果となる。生者と 自らの不条理な根源を隠微に 充填された物語は、こうしてひして、かろうじて耐えてきた 実際に無意味な死という出来 を得る。だがそうした物語は、 の存在の無意味さを隠蔽する 命だ。それによって人間はそ ことができ、生き延びる勇気 物語の本性を巡る著者の透 キシクし の「強さ」を期待してよいの にもつ人、肉親の戦死や刑死 だろうか(これは、ドストエ 遺族は、ひとり日本国籍者に フスキーの問いだった)。 生き延びた戦争経験者を肉報 はたして「国民」ひとりひと であった、との認識から、か らの存在を託するほかない るそうした人々の弱さを、个他 限らない。物語に救済を求め 自分の犯した罪を物語に鋳直 りに、物語を拒絶し通すだけ ない権利は、誰にあるのか。 れらを「弱者」として認知し いは積極的に、侵略者の手先 た「英霊」、という物語に自 れ、「国」というものに殉じ れがいかに空想の共同体であ り代わる恐れはないのか。そ 断罪自体が、強者の倫理に成 罪する権利は、誰にあるのか。 者を抹殺する暴力〉として断 すことで、かろうじて戦後を 「弱者」。心ならずも、ある 自己瞞着とは知りながら 「国民の歴史」とは、定義 一収することなく生きるのは や「在日」の人々だけだ、と |難民の境涯にあるパレスチナ ろうか。くたしかに、出来事を そうとする仕草だろうか。と 戒しつつ、傷ついた物語を癒 させる沈黙が指す傷に寄り添 る態度。それは、意味を脱臼 まなざし。出来事の語りえぬ。 させる政治技法― ものを丁寧に読み解く筆者の/來性という「罪人」へと降格 きながら、そとに封印されたかそれ以外の「大衆」を、非本 う。これらの作品の欠落を暴 ライヴェート・ライアンプラ 行を誘発する恐れはないか。 性をのみ主張する言説とだが、 からしてへ自己の帰属の正当 の見解に著者は同意されるだ 意味を突如曇らせる出来事の 様を証言する役を引き受け、でけてはいまいか。(弱意を拒絶 心を見いだす観衆の弱さだろ 作品が、その沈黙のうちに露 が、かえって亡霊の復活や横 怒に対抗しようとする意志 痕跡に躓き、そとに耳を傾けてどみなす誘惑に、結びつきか 呈するのは、作品=物語に安 ンダフル・ライフ』といった この「国民の歴史」という誘 「国民=国家の物語」へと回 『シンドラーのリスト』、『プ ころ多に丁遊民、町間の 自らの傲慢をひたすら自 することは、魔者をこを正当 写之人 存在でと位置付けることでは み終えたあと、最後にふと脳 力ない。本書を感嘆しつつ読 治山石波 のっぴきならぬ問いである。 に越えるか、という素朴だが 裏を過るのは、この罠をいか 被害者が自らを本来あるべき 修辞の関小 ば、「パレスチナ国家」が成 違っていまい、だが、とすれ いう著者の末尾での認識は間 のではないか。そこにはアド したhappy fewにとどまる 屈だ。こかし「難民ノスス チナ人」は存在しなくなる理 立した瞬間、もはや「パレス メ」を享受できる者は、倒立 ルノの言う「本来性」という 一少数の特権者に E STAN 960 35520 ひちゃう